

大震災と歴史資料保存
—阪神・淡路大震災から東日本大震災へ—

奥村弘／著

吉川弘文館

2012／2 217p 21cm 3,200円

近年、日本の各地において、地震などの災害から歴史資料を守るためのネットワークが設立され、東日本大震災以降はさらにその数を増している。1995年1月に発生した阪神・淡路大震災を受けて、神戸で発足した歴史資料ネットワーク(以下、史料ネット)は、それらのさきがけといえるものである。本書は設立から現在に至るまで、史料ネットの運営を担い続けてこられた奥村弘氏による著書である。

本書の議論はすべて、史料ネットを中心とする歴史資料の保全活動での実体験に基づいているが、著者はその紹介を通じて、歴史学が現代の市民社会とのかかわりのなかでどのように研究課題を見出し、かつ深めていくべきかという重要な問題を論じている。

第Ⅰ部「大規模自然災害における歴史資料保全のあゆみ」では、史料ネットが阪神・淡路大震災をうけて発足するに至った経緯と活動内容について詳しく紹介し、その意義をまとめている。また、活動を通じて著者自身が認識を深めるに至った、現代社会における歴史意識のありようについて論じ、現代日本社会のなかでいかなる歴史研究が求められるべきかを提起している。

第Ⅱ部「震災の記憶を未来につなぐ—災害資料の保存活用—」は、災害の発生および復興にかんして作成された史料（災害史料）の収集・保存および公開に関する活動を紹介したものである。あわせてこうした活動がなぜ必要なのか、そこにいかなる課題があるのかについても論じている。

第Ⅲ部「災害に強く、豊かな地域歴史文化を生み出すために」には、災害時のみならず、日常的な地域社会との関係の中で、歴史研究を市民とともに進め、豊かな歴史文化を生み出すにはどうすればよいかを考察した論考が収められている。具体的には、兵庫県の香寺町（現・姫路市）や小野市で研究者と市民が共同で行った地域史にかんする実践例を紹介しつつ、歴史学を市民社会形成の基礎学として位置づけることの重要性を訴えるとともに、地域歴史文化の創造における大学の役割を論じている。

本書で提示されているさまざまな論点は、いずれも著者自身が現実との格闘を通じて獲得したものであり、きわめて高い説得力を持っている。その内容は多岐にわたり、多くを学ぶことができるが、私がとりわけ重要だと考えた点を、以下思いつくままに述べたい。

歴史学と災害

著者は冒頭で、現代日本では「歴史の深さのなかで、豊かなイメージをもって現在を語りうる」市民社会の形成が必要であり、歴史研究者がその点で大きな役割を持つと述べる。その意味において、「災害と歴史研究」という領域は、単なる歴史学の一分野としての次元を超えることになる。すなわち著者は、

①自然災害が頻発する日本列島の歴史においては、大災害とそれに対する人々の対応自体がそこに生きる人々の日常的な歴史的な営みであること、②大規模な自然災害の発生が、列島に生きる人々が自然と向き合ってきた歴史を極限の形で再認識させること、③それゆえ、大規模自然災害の記録や資料を後世に残していく営みや、大規模災害時に現れる日本の社会や国家の特質を解明することは、歴史の専門家にとって極めて重要であること、以上を指摘している（11頁）。

災害という困難な状況に真摯に向き合うことによって、歴史学の研究課題は、地域社会における人の生存・生活のありかたにいつそう肉薄した切実なものたりえるといえよう。本書全体の議論がこうしたスタンスに基づいていることを確認しておきたい。

新たな歴史研究のスタイル

著者によれば、史料ネットが震災後に神戸の被災地域を巡回して史料の所在確認をした際に、どのようなモノが歴史的価値を持つのかについて、歴史学者と地域の人びととの間でズレがみられたという。しかし、地域の記憶を次世代に引き継ぐものが歴史資料であることを被災住民に説明すれば、十分理解が得られたとし、「市民社会の持つ文化的力量が一定の水準を持っていることが明確になった」と述べる（37頁）。また、震災後の記録作成をめぐる、「震災体験を自分自身のものだけにせず、広く社会と共有化しようとする広範な動きが被災地と現代日本社会に存在した」（84頁）ことが明らかにされているし、震災以外の時と場においても、たとえば小野市の「地域展」における地域住民と共同準備の際、地域を舞台とした生活の歴史について、人びとの関心がきわめて高かったことも述べられている（144頁）。

以上の指摘は、本書の理解においてきわめて重要であるが、だからこそいっそう、歴史研究者の社会的責任は重いということになる。著者は史料を使って「完成された」歴史像を歴史研究者が市民に返すという従来のや

り方ではなく、史料の発掘・整理・保存を含めた歴史像の形成過程そのものが、なんらかの形で市民にも共有されること、さらに、史料の価値を市民と共有していくことそれ自体が、歴史研究上重要な位置を占めるような歴史研究のスタイルを創出していくことが、重要だと述べている(66頁)。

私はこの提起についてまったく同感だが、ここで述べる「スタイル」は、自治体史レベルにおいては少しずつ試み始められていると考えられる(詳しくは、神戸の史料ネットや私が以前勤務していた飯田市歴史研究所など、多くの地域史研究拠点が参加している「地域史惣寄合」に注目されたい)。しかし、たとえば全国レベルでの学会における課題設定や若手研究者の業績評価などに関しては、こうしたスタイルの目指す方向性はまださほど配慮されていないのではないかと、この印象も受ける。この点は今後の重要な課題であろう。

市民社会形成の基礎学としての歴史研究

著者は現在の歴史学について、「研究の前提をなす社会的事象に対する共有認識を深め、その事象の歴史的な背景を踏まえて、資料に基づいて対象を分析するという歴史的なアプローチそのものが、人文社会科学の研究者の中で危機に瀕している」(135頁)と、きわめて厳しい指摘を行っている。とはいえ、「日本社会の基本的な在り方を歴史的に理解し、その上であらたな市民社会を組み上げていくための基礎学としての戦後歴史学」は、なおその意義をいささかも減じておらず、それゆえ「戦後歴史学が現代日本の市民社会の中でいかなる位置にあるのかを、歴史研究者が、それぞれの現場から、積極的に提示しあい、共有化していくことが必要」(138頁)だと述べている。

これについては、研究者が実際に地域社会と深くかかわることによって、はじめて有効な論点を獲得することができるはずである。その点で、先に述べたスタイルの実践を試みる香寺町や小野市などの活動はきわめて注目に値する。こうした創造的な取り組みは、全

国で設立されつつある災害史料救出ネットワーク—とりわけ災害発生以前に発足した組織—がどのような活動を行うべきかを考える際にも重要な指針となるはずだが、そのことはまさに著者の真意だと思われる。

すなわち、災害史料救出ネットワークの活動の意義が、すでに発生してしまった災害から史料を救うという「事後処理」や、史料消失・散逸の「予防措置」だけではなく(もちろんそれらはきわめて重要だが)、あらたな地域歴史文化の創造に資するところにあることが、本書から明らかとなるのである。ぜひ一読をお薦めしたい。

〔横浜国立大学 多和田 雅保〕